

Students

Faculty members

Administrative staff



A.G.U.

Aoyoma Gakuin University

Faculty Development Activities Report 2007

●●●● 青山学院大学FDプロジェクトチーム ●●●●



CONTENTS

大学新任教職員オリエンテーションの開催	1
『「よりよい授業を行うための取組」に関するアンケート』実施	2
第2回FD公開シンポジウムの開催	5
教育に目を向けるきっかけになれば	6
アカデミックライティングのための学習環境デザイン	7
シンポジウム参加者の感想	8
これまでの歩み（バックナンバー）	9
今後の本学のFD活動に向けて	10

2007年度FDプロジェクトの主な活動

1 大学新任教職員オリエンテーションの開催

2 『「よりよい授業を行うための取組」に関するアンケート』実施

3 第2回FD公開シンポジウムの開催

大学新任教職員オリエンテーションの開催

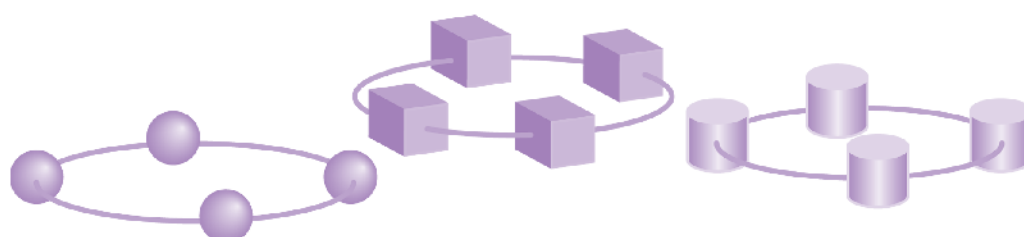
国際政治経済学部・教授 仙波 憲一
(FDプロジェクトチームリーダー)

本学院に新たに就任する教職員に対して、学院では毎年4月上旬に「新任教職員オリエンテーション」を実施しており、理事長、院長、常務理事等により、学院の概要、教育環境の外的・内的要因による変化、教育方針、キリスト教教育、私立学校をとりまく法体系などについて説明がなされている。

これに連動する形で、大学では大学新任教職員オリエンテーションを実施した。これは大学の状況を理解して、大学への帰属意識を高めてもらう目的で実施され、今回で3年連続となった。昨年同様、大学執行部より本学の教育理念や建学の精神、また大学運営の基本方針、本学の特徴的な

取組みである青山スタンダードの理念や科目構成など、またアドバイザー・グループ制度などについて説明が行われた。

本学では他大学同様に、この企画をFDの一環として位置づけていることから、今後はもっとFDの視点を盛り込んだ内容にすることが必要であろう。特に本学における組織的な教育・研究の取り組み等の現状と今後の課題について、より明確にメッセージを伝える工夫が求められよう。これまでの経験を踏まえ、更なる改善を加えながらこの企画を発展的なものにして欲しいと考える。



『「よりよい授業を行うための取組」に関するアンケート』実施

学長室 浜本 嘉郎

(FDプロジェクトチームメンバー)

本プロジェクトでは、2005年度より大学の授業改善のための材料を提供する目的で、専任教員及び授業を様々な形で支援する職員を対象に「授業公開」を企画・実施してきた。2年間の活動で一定の成果をあげてきたが、一部の先生から「担当授業等の関係で、時間と場所が限定される授業公開では十分な活用ができない」とのご意見も出されていた。

そこで、2007年度は新たな試みとして、授業公開や授業参観への参加の有無に関わることなく、各先生方の授業での取組や工夫を紙面で共有し、授業改善に役立てることを目的とした『「よりよい授業を行うための取組」に関するアンケート』を実施することとした。

アンケートは、専任教員（約430名）と本年度出講の非常勤教員（約1,320名）を対象とし、質問項目は以下のとおりとした。

1. 先生ご自身の考える、大学における理想の授業またはめざしている授業とは。
2. 授業準備や授業実施にあたり心がけていること。
3. 受講学生に対して心がけていること。
4. 授業を運営するうえで苦労していること、悩みなど。
5. 今後、授業改善のために有用と思われること、必要なもの。
6. その他、ご意見、ご提案等。

企画段階では、「選択式回答を採用して回収率や回答率をあげるべきではないか」との議論もなされたが、「むしろ自由記述の方が、役立つ情報を得られる」との結論になり、回収率低下および集計作業の方法等に不安はあったものの、自由記述式の回答方法により実施することとした。回収率は専任教員56名（約13%）、非常勤教員437名（約33%）であった。結果として専任教員の回収率が低かったのは残念であるが、このような趣旨のアンケート実施は本プロジェクトとしても初めての試みであり、スケジュール設定や依頼方法、投稿フォーム準備等、プロジェクト側の実施体制について今後へ課題を残すこととなった。

アンケートの回答は、当初のねらいどおり各先生の授業に対する思いがその文章を通じてストレートに表現され、選択式回答では得ることのできない貴重な取組や課題が明らかになった。とりまとめた冊子は400ページを超えるものとなり、専任の先生と回答いただいた非常勤の先生には12月中旬に配布した他、事務ポータルサイト上のFDプロジェクトのページでも公開しているので、是非とも生の声をご一読いただきたい。提出された意見等をグループ化した結果、別添「大学で行われる授業のイメージ図」のような授業をとりまく環境が浮かび上がってきた。また、各分類（A～Jグループ）の主な意見は、別添のとおりである。

今回のアンケート回答をとりまとめるうえで、特に感じたことは以下の3点である。

1点目は、授業を受ける学生のマナーの低下（遅刻、途中退室、私語等）や学習意欲の低下（学習目的や進路選択等の意識欠如、社会問題への無関心、問題意識の欠如、無反応、集中力の欠如等）、基礎学力の低下（読解力・文章記述力・表現力等）といった問題点が指摘される一方で、学習意欲や基礎学力・知識に関する二極化も指摘されていた。これらの要因は、高校までの教育や個人の置かれていた環境によるものが大きいと考えられるが、多くの先生方が受講学生の学習姿勢や基礎学力の不足、個人格差等によって授業を実施しにくい状況にあるならば、大学入学初期の段階で、大学全体あるいは学部・学科・研究科として組織的に対応する必要もあると感じられた。

2点目は、学問領域、配置年次、必修・選択の科目種別、クラスサイズ等、科目の置かれている状況によって求められる授業内容や授業方法が異なっているものの、それぞれの先生がご経験のなかで培われた教育観に基づき、「理想とする授業」を行おうと一生懸命努力されていることが感じられた。その手法は千差万別ではあるが、その中でも特に双方向コミュニケーションは重視され、キーワードを上げると「言葉遣いに注意する（丁寧に）、礼儀正しく、アイコンタクト、質問を十分にさせる、質問に丁寧に回答する、理解・納得いくまで説明する、メールアドレス公開、オフィスアワー実施、座席指定、写真付き受講カードの使用、名前を覚える、名前で声をかける、リアクションペーパーの使用、グループディスカッションの実施、多くの学生に発言の機会を与える、教室内を机間巡回、全員にコメントを返却する、褒める」等、いろいろな努力をもって学生の学習効果向上に取り組んでいることがうかがえた。

3点目として、「大学の授業を向上させるために、間接的ではあるが授業支援を担う職員の役割がますます期待されている」ということである。先生方が授業の実施に安心して力を注ぐためには、特にグループIやJに示されるような環境を整備しておくことが職員には求められる。言い換えると、いくら先生方が万全の準備をしても、授業の環境（教室サイズ、施設・設備、資料準備等）が不適切であれば、理想とする授業の実現は難しいということである。

以上のことも含め、今回のアンケートの集計では、よりよい授業を実現するためには、単に授業担当教員の教室内あるいは授業前後の質的向上等に限定されるものではなく、職員や学生のあり方を含めて、大学の教育方針やカリキュラム、入学試験、教育環境の整備・支援に至るまでを総合的にコーディネートすることが重要であると推測される。これについては、プロジェクト発足初年度（2005年度）のFD公開シンポジウムの井下理先生（慶應義塾大学）によるご講演の中で、「教育は、大学を構成する教員、職員、学生、社会によって組織的に改善していかなければならない」

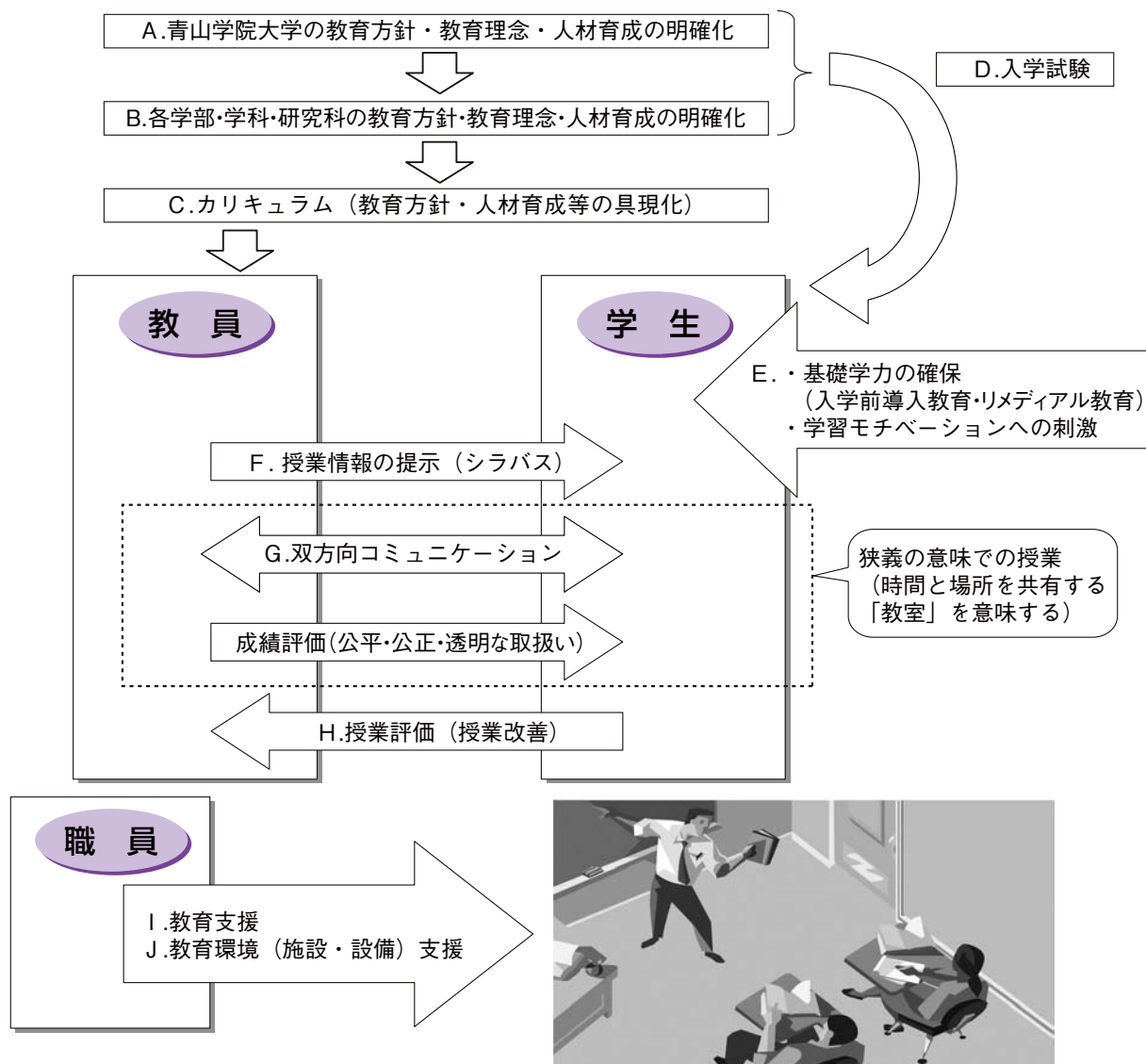
とご教授いただいたことを、改めて現実のものとして認識させられることになった。

なお、本プロジェクトでは、これら教員個人へのアンケート調査と平行して、各学部・研究科等で現在行っているFD活動についてもアンケート調査を行い、今後の活動活性化の材料として学部長・研究科長に配布している。

設置基準の改正により、大学院および学部教育のFD活動が義務化されていくなか、本学のFD活動は次のステップに進むべきものと考えられる。アンケートの回答内容もふまえて、大学全体、あるいは各学部・学科・研究科・各事務

部署および個人等がそれぞれのレベルにおいてどのような方針で取り組みを行っていくのが今後の課題である。そして、その際に注意しなければならないことは、個人や当該事務部署といったセルフチェックでは限界があるということである。例えば、学生や他教員、他部署等にヒアリングを行い、個人や当該部署で解決すべき課題と、組織的に対応しなければならない課題を共有することなども改善に向けた第一歩であるといえる。これらの活動をうまく連携して実行することが、学生の学びの向上に役立ち、青山学院らしい学生を育成することに繋がるものと考えられる。

大学で行われる授業のイメージ図



各分類（グループ）の主な意見

- | | |
|--|---|
| 【グループA. 青山学院大学の教育方針・教育理念・人材育成の明確化に関するもの】 | ・大学・学部・学科・研究科の理念・教育方針・人材育成・教育観の明確化と共有
・学部・学科・研究科カリキュラムにおける担当科目の位置づけ、到達目標の明確化 |
| 【グループB. 各学部・学科・研究科の教育方針・教育理念・人材育成の明確化に関するもの】 | |
| 【グループC. カリキュラム (教育方針・人材育成等の具現化) に関するもの】 | |

【グループD. 入学試験に関するもの】

- ・学ぶ意欲のある学生を選抜する入学試験方法の検討

【グループE. 基礎学力の確保・学習モチベーションへの刺激に関するもの】

- ・大学全体として学習に対するモチベーションを高める取組が必要
- ・入学前導入教育のプログラム化、充実
- ・各学部・学科で最低必要となる基礎知識をもたせるために、リメディアル教育の充実

【グループF. 授業情報の提示（シラバス）に関するもの】

- ・正確な授業情報の開示・伝達。学生が十分な情報をもって当該科目を履修できるように、詳細なシラバスの作成（授業の目的、授業計画、成績評価方法、履修条件等）。

【グループG. 双方向コミュニケーションに関するもの】

〈双方向授業の実践〉

- ・やる気、知的関心、自分で考える、学問の楽しさを刺激する工夫（学生参加型）
- ・コミュニケーションをとりやすい環境・雰囲気作り

〈Webサイト等を利用した教育環境に関するもの〉

- ・Web上に授業支援システム（学習管理システム）等を導入する。これにより、質問への回答（非常勤教員は学内に常駐できないので）、学習能力の異なる学生個々への個別対応の実現、予習・復習を促すためのシラバスUP、配布プリントの事前出力、欠席学生への資料提供、教員・学生同志が容易に議論、疑問、悩みを交換、学生からの要望にも即時に対応する、といった効果が期待できる。

【グループH. 授業評価（授業改善）に関するもの】

〈授業評価アンケートに関連すること〉

- ・授業評価アンケートは、後半部分で軌道修正ができるので、中間時点と終了時点の2段階で行うべき。
- ・授業評価アンケートの結果は、自由記述欄を含めて担当者ごとにすべて公開されるべき。その際、担当者は学生に対してコメントを返すべき（教員は緊張感をもつことが必要）。
- ・授業評価アンケートは、無記名のため無責任な意見が多く、学生の甘えを助長している。責任感のある建設的な意見を出させるために、記名式にする必要がある。

〈他教員や他組織との連携〉

- ・授業内容について、教員同志（専任と非常勤、非常勤と非常勤）の情報交換・連携・批判の仕組みの必要性（授業の進め方の相違が、学生に混乱を招いている）
- ・教歴の浅い教員とベテラン教員とで、講義の組み立て方、講義の運営などについて、意見交換をする機会を設ける
- ・少し大きな規模で学生と意見交換をするような機会を設け、直接学生とやり取りをすることによって、教員と学生との間の共通認識を作りやすくする

【グループI. 事務組織の教育支援に関するもの】

〈教育支援〉

- ・授業改善を専門にする専任教員や事務スタッフがいるセンターを開設し、そこで、授業改善に関わる全学的な補助を行う。各学部や学科別に、授業改善のための担当を置き、センターと協力して、授業改善に取り組むことが必要。
- ・出席の状況は成績にも関係するので正確に行う必要があり、学生カードの磁気読み取りシステムや、出席カードを機械で読み取る仕組みなど、学生の出席管理を正確に且つ合理的にできるシステムの導入を検討いただきたい。

〈AV機器等の使用に関するもの〉

- ・授業支援のためのPCの操作説明会の随時開催（教室の視聴覚機器の操作、プレゼンテーションソフト、表計算ソフト、データベースソフト、動画、デジタルカメラ、教室でのインターネット接続等）
- ・大学にどのような使用可能な機材があるのか、大学事務案内や事務パソコンから随時閲覧できる環境を整えてほしい

〈教材の印刷等に関するもの〉

- ・授業時間の20～30分くらい前に事務局スタッフに手渡すことで、コピーのアシストが得られると助かる

〈事務との連絡に関するもの〉

- ・諸事務処理関係ページについて（申請書のダウンロードなど）、学外からもアクセスできると、仕事の効率化が可能

【グループJ. 事務組織の教育環境（施設・設備）支援に関するもの】

※「現在使用中の設備で具体的に不適と考えられるもの」として、空調、音響、AV機器、黒板、資料印刷、講師控室、図書館、教室形状・テーブル配置、LL教室等、具体的な改善要望が約60件出された

〈教室に設置されるAV機器等に関するもの〉の一例

- ・授業の度にいちいちパソコンを設置する手間と時間は無駄であり、各教室に固定パソコンを設置したり、USBメモリなどを持参するだけで使用できるようにしてほしい。
- ・スクリーンやパソコンのセットや片付けを休み時間内に行うことが難しい（休み時間と実態が合わなくなっており、授業時間内に行う以外代案はないが）。
- ・各教室のAV機材の操作がまちまちで覚えにくいいため、統一できないものか。
- ・教室の機材（DVD、部屋の照明など）が、授業形態を考えず、画一的に設置されている。
- ・PCの教室で、集合教育とグループ演習を両立させることのできるデザインはないものか。
- ・教室を暗くしなくても画像・映像資料を見せられる（学生が画像・映像を見ながら筆記ができる）ような設備があると良い（毎回、準備のために授業の流れが中断するので）。

第2回FD公開シンポジウムの開催

実施の目的、実施概要

経営学部・教授 田中 正郎
(FDプロジェクトチームメンバー)

2007年11月21日、「これからの本学のFDを考える ―授業改善の実践例を通して―」をテーマとして「第2回FD公開シンポジウム」が開催された。本学の理工学部ならびに文学部における取り組み等を紹介し、本学全体の共有知とするとともに本学全体のFD活動のさらなる高度化につなげたいというのがその趣旨である。

講演者には、理工学部情報テクノロジー学科の稲積宏誠教授と文学部教育学科の鈴木宏昭教授をお招きし、理工学部ならびに文学部での取り組みを紹介していただいた。稲積宏誠教授からは、「本学にFDは定着するのか？ 授業改善を目的とした授業アンケートの効果的活用法」として稲積宏誠研究室で開発された授業改善アンケート分析ツールについて開発の経緯からお話いただいた。鈴木宏昭教授からは、「アカデミックライティングのための学習環境デザイン」として授業で実践されているレポートライティングの概要についてお話いただいた。

当日、シンポジウムはテレビ会議システムを使って相模原キャンパスに同時中継された。青山キャンパスと相模原キャンパスとは地理的にかなり離れてはいるが、FD活動に関しては全学一体となって取り組んでいるという本学の姿勢を象徴するものとなった。シンポジウム自体は武藤元昭学長からの挨拶にはじまり、講演は各約45分、質疑・総合討論50分、休憩を含めて約3時間に亘っておこなわれた。教

員24名、職員15名、学生4名の出席があった。

質疑・総合討論では教員に向けて2007年7月に実施した「よりよい授業を行うための取組」に関するアンケート結果の概要が報告された。また、出席者が比較的少数であったことを生かして、出席者全員からシンポジウムの内容に関することも含めて本学におけるFD活動について意見ならびに感想をきくことになった。学生の視点から、職員の視点から、そして教員の視点からと3方向から光があたり、三者間で情報共有できたことは意義深いことであった。とくに、互いに相手のことを知っているようで、実はあまり分かっていないとの印象を持った。この点は青山学院大学におけるFD活動の今後の課題の一つであろう。

FD活動に関しては、様々な方法論やITCを活用したツールの開発がなされており、その意味で格段の進歩を遂げてはいる。しかし、今回の二人の講演者の講演ならびにシンポジウム参加者の発言に共通してあったのは、一人の人間として総体的に捉えることの重要性である。本学のめざすFD活動は、各先生方の様々な経験のなかで蓄積された特徴的な取り組みを長所として他の教員と共有するとともに、個人では解決できない個別の問題点や課題等についても共に改善の方法を探り、最終的に「学生の学びの向上に役立てることにある」としている。この考え方の真義を確認できたシンポジウムであった。

第2回青山学院大学FD公開シンポジウム プログラム

テーマ：「これからの本学のFDを考える―授業改善の実践例を通して―」

日 時：2007年11月21日（水） 15時00分～

場 所：青山学院大学青山キャンパス総研ビル12階大会議室

相模原キャンパスB棟7階第3会議室

相模原キャンパスは青山キャンパスとのテレビ会議システムによる同時中継

司 会：本学FDプロジェクトチーム 田中 正郎（経営学部教授）

15：00～15：05 開会の辞

15：05～15：15 挨拶 青山学院大学長 武藤 元昭

15：15～16：00 講演 理工学部情報テクノロジー学科教授 稲積 宏誠
「本学にFDは定着するのか？ 授業改善を目的とした授業アンケートの効果的活用法 ―ささやかな取り組みとして―」

16：00～16：45 講演 文学部教育学科教授
ヒューマン・イノベーション研究センター副所長 鈴木 宏昭
「アカデミックライティングのための学習環境デザイン」

休 憩

17：00～17：50 総合討論 テーマ：「これからの本学のFDを考える」

17：50～17：55 討論総括 本学FDプロジェクトチーム 田中 正郎（経営学部教授）

17：55～18：00 閉会挨拶 本学FDプロジェクトチームリーダー・副学長 仙波 憲一

教育に目を向ける きっかけになれば

理工学部・教授 稲積 宏誠

教員は無意識のうちに「研究者」としての自分を評価してもらいたいと願うものです。そして、自分自身の専門分野そのものだけを教えたいという気持ちを強くもつことになります。その結果、学生に教えるべき科目ではなく、教員が教えたい科目からカリキュラムが構成されてしまうといった例も少なからずあります。本学は、後継者育成も目的の一つであり、立派に後継者を育成しているケースもありますが、残念ながら研究者養成を主たる目的とした大学ではありません。本学の大きな責任は、大半の卒業生がそうであるように、建学の理念に基づき、社会の幅広い分野を支えていく優れた人材を輩出していくことです。

しかし、「そうではないのだ。あくまでも研究大学、その教授なのだ」と考えてしまうことで、私たち教員は「本当に学生にとって必要なことを身につけさせているのか？」という問いには正面から向き合っていないことがあるように思えます。多くの取り組みが、「学生のため」ではなく「教員や職員のため」のものになってしまうのもこのためでしょう。

今回のFDシンポジウムでは、「授業改善のためのアンケート」（けっして「授業評価アンケート」ではありません）分析システムを紹介しました。本来、このようなアンケートは、「何をどのように教えていけばよいのか」について考え直すための有効な材料となるべきもののはずですが、実体としては、すでに形骸化してしまっているように思えます。システムの運用でよく用いられる言葉として、PDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルというものがありますが、アンケートの実施については、見失われているように思えます。この分析システムは、まさにこのサイクルを実現させるためのものです。すなわち、計画⇒実施⇒点検⇒処置を繰り返していくために、点検（アンケート）⇒処置（アンケート結果の活用）を実現するものです。

また、アンケート実施を振り返ると、入り口論で相当長い時間を費やしたように記憶しています。「評価」ということを意識するあまり、「学生に甘い授業のみが評価されるだけだ」などの意見や、「教員の身分問題」につながるのではないかと議論もありました。もっともな面もありますが、そのことは、教員個々の対応や組織としての対応によって容易に回避できる問題です。そうこうしている間に社会状況は変化し、否が応でも、ネット社会の浸透によって、様々な情報

が独り歩きしているのが現状です。そのなかできちんとした教育を実現するための対応は、自ら可能な情報開示を実践していくことではないでしょうか。そこに、実施後の点検⇒処置の工夫と公開性の意義があると思います。

FDシンポジウムで紹介したシステムの目的は大きく2点あります。

1. 教員自身がアンケートの意義を実感できること：
その最大のポイントは、「どのような点を改善することが、学生の満足度向上につながるのか」ということです。ただし、学生の見方は一律ではありません。そこで、まず学生の授業に対する受け止め方の傾向でグルーピングを行ったうえで、「○○のようなタイプの学生グループが何%程度占めていて、そのような学生には××に注意を払うことが理解度向上に役立つ」といった情報を取得することができます。
2. アンケートを通じて学生の授業への参画意識をもたせること：

自ら行ったアンケート結果が本当に担当教員に伝わったかどうかを、学生自身に実感させるということです。たとえば、担当教員はどのようにそのメッセージを受け取ったのか、またどのように授業改善に反映されるのかを把握することができます。さらに、学生のタイプ別グルーピングによって、他の学生はどのように感じていたのかを把握することで、客観的に「学ぶ」ことを見直すことができるかもしれません。

具体的なシステムは、現在、理工学部シラバス入力システムと連動して試作版として稼動しています。教員が自分自身のアンケート結果（Excelで整理されたもの）をアップロードすれば、分析システムを直接利用することができます。特に、このシステムをつくるにあたってデータ提供などの協力をしていただいた機械創造工学科の先生方については実際に利用していただき、好評を得ています。

学生にとって何を身につけることが重要なのか、大学教員の教育面での役割は何なのか、そのようなことを考えるきっかけとなるシステムであれば、またこのようなシステムを気軽に使ってもらえる環境になればと願っています。

アカデミック ライティングのための 学習環境デザイン

大学入学者の層が大きく変化したことにより、従来は習得済みと考え大学教育としては扱ってこなかったようなトピックに対する教育の必要性が高まってきている。その中の一つにレポートライティングスキルの育成がある。

レポートライティングは大学での研究生活において欠くべからざるものであるが、体系的な教育が積極的に行われてきたとは言えない。その結果、4年生になっても作文と大差のないものをレポートとして提出するものは少なからず存在する。

こうした現状を改善すべく、筆者らの研究チーム（文学部小田教授、杉谷准教授、長田尚子総合研究所特別研究員）は、総合研究所からの研究助成を受けて、レポートライティングを育成する学習プログラムの開発と、それを支援する学習環境の構築を行ってきた。

レポートライティングにとって重要なことは2つある。1つは問題発見・洗練である。問うに値し、論証が可能なテーマを見つけることはレポートを作成にあたって最も重要なことと言える。2つめは論理的な文章の構成である。すなわち論旨が一貫し、人を説得できる文章を作成することである。しかしながら大学生、特に専門分野の知識が十分ではない初年次生にとって、これら2つはいずれもきわめて困難な課題となる。

我々はこうした困難な課題の達成のためには、協調学習環境が必要であると考えている。協調学習（collaborative learning）は、他者や様々な外的なリソースを積極的に活用しながら、対話的に理解を深めていくことである。レポートライティングの授業において協調学習を行うことで問題発見・洗練、論理的な文章の構成のいずれもが促進される可能性がある。たとえばまだ十分に練られていないテーマについて他者から問いをぶつけてもらったり、他者から批判をされたりすることで、テーマが洗練されたり、より展開される可能性がある。また自らが行う論証についても他者との交流により、論理的な飛躍や、データの適切性

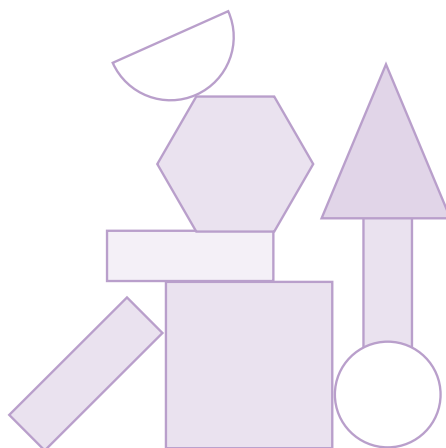
文学部・教授
ヒューマン・イノベーション研究センター副所長
鈴木 宏昭

について反省的にとらえられるようになる可能性がある。

我々はこうした協調学習が授業時間外にも可能になるように、Blogを用いた学習環境を構築した。Blogはホームページのようなものであるが、作成が容易であること、また他者とのコミュニケーションを行うための機能（トラックバック、コメント）が標準で装備されていることから、初年次生の協調学習にとって適当であると考えられる。

初年次生を対象とした実際の授業において、あるテーマについてまずレポートを作成させ、これをBlog上に公開させた。公開された各自のレポートに対してグループの他のメンバーにコメントを行わせ、さらにコメント内容についてのグループディスカッションを行わせた。そして、この後にコメントやディスカッションを反映させる形ではじめのレポートを修正させた。その結果、取り上げる問題の一般性、データの適切性、他の主張との対比などにおいて、大きな改善が見られた。

このように協調学習を用いること、また適切にITを活用することにより、レポートライティングの質を高めることが明らかになった。ただし今回の研究はまだ限定的であり、より複雑なテーマのレポートについては今後の検討が必要である。特に、問題発見・洗練には批判的読み（critical reading）が重要な役割を果たすことが予測され、これを陽に取り込んだ学習プログラムと環境の開発が必要であると考えられる。



シンポジウム参加者の感想

参加者アンケートをもとに

学長室 伊藤 大輔

(FDプロジェクトチームメンバー)

シンポジウム後に回収させていただいた「参加者アンケート」について、主な意見等を以下に掲載している。この中で「FDの組織的な体制作りの必要性」に関する記述が数点あったが、これについては、総合討論の場においても比較的多くの方から発言があった。FDプロジェクトは2005年度の発足以来、様々な活動を通して本学のFDのあり方について模索を行い、一定の成果を残してきたが、プロジェクトとしての活動は本年度で一旦幕を閉じる。しかし、周知の通り2008年度から学部教育においても「組織的な」FD活動が義務化され、引き続きFDへの積極的な取り組みが求められることには変わりはない。このような社会的背景も手伝って、「今後はプロジェクト体制ではなく、きちんとした組織を形成して、大学全体として本格的にFDに取り組むべきだ。」というのが、参加者に共通する意見だったように思う。

過去3年間FDプロジェクトが率先して活動を行ってきたが、本学のFDはまだまだ一部の教職員のものであるよう

な印象を受ける。私自身プロジェクトに参加させていただいたのは本年度からであるが、私を含め、FD・SD (Staff Development) への意識が学内の教職員に充分浸透しているとは思えない。しかしながら、これまでのFDプロジェクトの活動により、徐々にではあるがFDへの関心が高まりつつあることも感じている。今回も教員・職員・学生というそれぞれの立場から、FDへの関心が高い方の参加があり、貴重なご意見をいただくことができた。また、今回のご講演者同様に、すでに独自のFD活動を展開している先生方も、もちろんいらっしゃる。

2008年度より誕生する新生FD組織には、これまでFDプロジェクトや教員個人が行ってきたFD活動を集約し、どのように大学全体へ波及させ、本学らしいFDを創っていくかということを徹底的に検証していただきたい。その結果、本学教職員のFDに関する意識が高まり、最終的には本学の教育活動の活性化につながっていけばよいと思う。

「第2回 FD 公開シンポジウム」参加者アンケート

(主なご意見・ご感想)

- ・FDの組織的な体制作りをしなくてはいけない時期に来ているので、現在のFDプロジェクトをひっぱりだいていただいている先生方にその原案作りをお願いしたい。
- ・次期ICT戦略策定の中で、授業支援を支えるシステム作りにFD活動の方針を反映させる。標準的なシステム作りは情報センター（ないしそれに代わる担当部署）にお願いするにしても、大きな方針・方向性については、やはりFDプロジェクトメンバーをお願いしたい。
- ・慣れていない者による工夫は極端に偏りがち。「研究<教育」「研究=教育」を目指すべきではないか。
- ・学生の学習内容が研究の一部であり得る理工学部と人文社会学系学部とでは、FDの必要性も具体的ミッションも大きく異なるのではないか。
- ・様々なFD活動によって出現する新生青山学院大学は、自分自身が18歳だったら、あるいは自分の子弟が入学を望む場となり得るのかを意識する必要があるのではないか。
- ・稲積先生の講演内容は非常に興味深く、これだけでも本日のシンポジウムに出席する価値があった。理工学部以外でもこのシステムを利用できるようになることを望む。ここまでやって初めて「アンケート利用」と言えるように思う。

- ・鈴木先生の講演内容は、私自身が無意識のうちに実施していたフレッシュャーズセミナーでの取り組みを言語化するのに大変役立った。
- ・両講演ともに多くの教員にとって実現困難。教員に何かをさせるために必要な前提条件の整備が第一順位のミッションではないか？
- ・総合討論の時間が「討論」の時間ではなかったのが極めて不満でした。もう少し時間があると嬉しかったです。
- ・先生方が一つ一つの講義の在り方や、教育のことをいかに考えて授業を行っているのかその一端を見ることが出来て、大変有益でした。ただ、最後の討論に関しては、時間も短く、全員が一言コメントをするような形で終わってしまったのが残念ではありました。次回はパネル形式にするのも一案かと思います（教員・職員・学生・経営者の各氏で）。
- ・参加者が少ないのが気になりました。教職員・学生とももう少し参加者が増えるよう周知が必要だと思います。
- ・青学のFDプロジェクトが今後現実に則した形で具現化され、よりよい教育サービスがなされることを切に願っております。
- ・「FDの成功」とは何かについて、先生方のご意見・ご認識を伺える機会を設けていただければ幸いです。

これまでの歩み（バックナンバー）

2005年版

CONTENTS

『FD プロジェクト活動報告』発行にあたって	1
FD って何？ FDをとりまく環境	2
大学新任教職員オリエンテーションの開催	3
FD公開シンポジウムの開催	4
FD合宿研修会の開催	7
授業公開の実施	9
学生モニターからの意見聴取	13
学生モニターとの意見交換懇談会の開催	14
学生による授業改善のための学生アンケート実施状況	16
学生からの意見聴取の実施状況	17
2005年度のプロジェクト活動を振り返って	18
2006年度の活動に向けて	19



2006年版

CONTENTS

はじめに	1
大学新任教職員オリエンテーションの開催	1
授業公開の実施	2
総合企画部知的資産連携機構による研修	8
学生モニターからの意見聴取	10
学生モニターとの意見交換懇談会の開催	12
FDをとりまく環境	17
2007年度の活動に向けて	18



今後の本学のFD活動に向けて

国際政治経済学部・教授

FDプロジェクトチームリーダー 仙波 憲一

本FDプロジェクトは2005年に立ち上がり、早くも3年が経過した。この間、組織的・計画的に教職員の資質開発の実行を目指し、教職員の方々のご協力を得て、多くの企画が実施された。この間、外部環境も変わり、専門職大学院のFDの義務化から始まり、学部においても組織的にFD活動をすることが2008年度から義務化された。

したがって、本プロジェクトの3年間は、本学において全学的なFD委員会が立ち上がるさいの、助走期間と考えられる。この意味で本プロジェクトの役割はこれで終わりである。いよいよ2008年度は本学の教育改善に資する組織的取り組み元年となる年で、記念すべき年となるであろう。委員会活動を通じて、本学の教育活動がさらに改善し、活性化することを願ってやまない。

最後に、これまで本プロジェクトに積極的に参加してさまざまな意見を出され、企画の立案・実行を担ってくれたプロジェクトメンバーの一人一人に感謝の意を表します。3年間ありがとうございました。

2007年度FDプロジェクトチームの構成

構成員（21名）

氏 名	所属・職位	氏 名	所属・職位
○仙 波 憲 一	国際政治経済学部・教授	鳥 海 貴 裕	(青) 学務部教務課
今 井 重 孝	文学部・教授	藤 田 陽一朗	(青) 事務システム室
杉 谷 祐美子	文学部・准教授	祖父江 健 一	(青) 進路・就職センター・進路係長
白 井 邦 彦	経済学部・教授	石 井 智 子	(青) 国際交流センター事務室
江 泉 芳 信	法務研究科（法学部併任）・教授	武 田 智恵子	(相) 教育・学習支援ユニット メディアライブラリーグループ
申 恵 丰	法学部・教授	本 橋 正 人	(青) 学長室・室長
田 中 正 郎	経営学部・教授	伊 藤 大 輔	(青) 学長室
内 山 義 英	国際政治経済学部・准教授	小 澤 佳 世	(青) 学長室
三 井 敏 之	理工学部・准教授	小 島 まゆみ	(青) 学長室
中 田 恭 子	理工学部・専任講師	浜 本 嘉 郎	(青) 学長室
戸 田 隆 也	(青) 学務部教務課		

○はチームリーダー

注：(青) 青山キャンパス、(相) 相模原キャンパス

本報告書における所属・職位は2008年3月31日現在における所属・職位を記載した。



本学 FD プロジェクトに対するご意見・ご提案等ございましたら、
下記事務局までご連絡ください。

冊子名 Faculty Development Activities Report 2007

発行日 2008年3月31日

発行者 青山学院大学 FDプロジェクトチーム（学長室内）

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

TEL 03-3409-7510

FAX 03-3409-9424

編集協力 ヨシダ印刷（株）

地 の 塩、世 の 光

The Salt of the Earth, The Light of the World

【青山学院スクール・モットー】
